

経済マンスリー

[アジア]

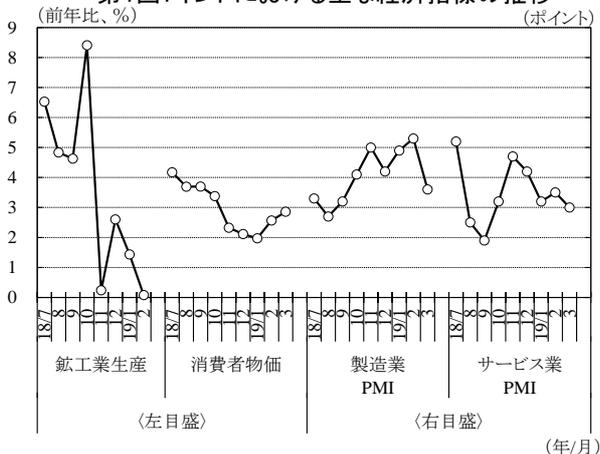
足元減速感を強めるも、年半ば以降持ち直しが期待できるインド

インド経済は減速感を強めている。実質 GDP 成長率をみると、世界景気拡大と同期して 2017 年後半から加速したが、2018 年 1-3 月期に前年比+8.1%のピークを記録した後は輸出鈍化などから 3 四半期連続で低下、同年 10-12 月期は同+6.6%まで減速した。足元の月次指標をみても、マインド指標である製造業・サービス業 PMI こそ 3 月にそれぞれ 52.6 ポイント、52.0 ポイントと共に好不況の分かれ目である 50 ポイントを上回ったものの、足の遅いハードデータである鉱工業生産は 2 月が同+0.1%と昨年末以降の低迷を脱せていない（第 1 図）。物価面では、3 月の消費者物価上昇率が同+2.9%と前月（同+2.6%）から若干加速したものの、引き続き目標（同+4.0%）を下回っている。

こうしたなか、インド準備銀行（中央銀行）は、4 月 4 日に行われた金融政策決定会合で政策金利を 6.25%から 6.00%へと、2 月に続く今年 2 回目の利下げを実施した（第 2 図）。アジア諸国の多くが、米国の利上げ観測が後退し、自国通貨安定、インフレ圧力低下という環境の中でも今後の政策余地を残す観点から金利を据え置いているのに対し、こうしたインドの動きは特筆すべき動きといえる。これは、前述の通りインフレ率が低位に止まっていることが後押ししている面はあるものの、昨年 12 月にモディ政権との対立で退任したとされるパテル前総裁の後任として就任したダス新総裁のもと、インド準備銀行が景気挺入れを優先している側面が大きいとみられる。ダス総裁は政策金利変更幅の柔軟化を示唆する発言もしているため、更に大胆な金融緩和に踏み切る可能性も否定できない。

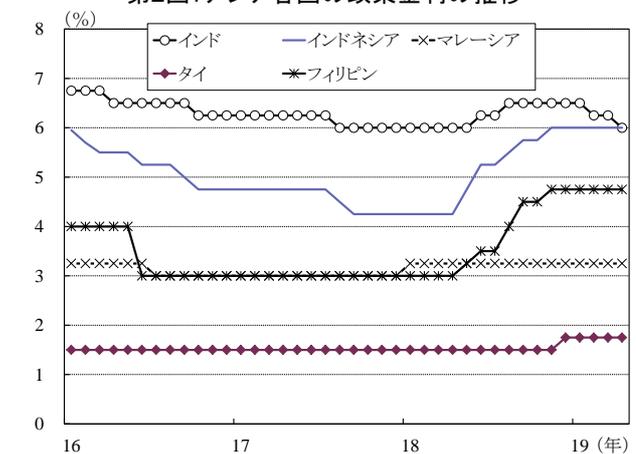
インド経済は、鉱工業生産の動きから推定する限り今年 1-3 月期は更に減速した可能性が高い。但し、先行きについては、先進国や中国の製造業関連指標には底打ちの兆しがみられることから、貿易チャンネルを通じてインドの生産や輸出も持ち直しが期待できる。また、緩和的な金融政策が個人消費をサポートすることに加え、今回の選挙で与党優位とみられるなか政治不安の後退もあり、経済は年半ば以降持ち直してくるものとみられる。

第1図: インドにおける主な経済指標の推移



(資料) インド準備銀行、Bloombergより三菱UFJ銀行経済調査室作成

第2図: アジア各国の政策金利の推移



(資料) 各国統計より三菱UFJ銀行経済調査室作成

照会先：三菱 UFJ 銀行 経済調査室 高瀬 将平 shiyouhei_takase@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の販売や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願ひ申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊行ホームページでもご覧いただけます。